

みじき人々ひが事よみて終には異名さへつき給ひにき、ちかく徳大寺の左大臣○定實は無明の酒をなもなきさけとよみ給へりしかばな、しの大將といはれ、五でうの三位入道○藤原俊成は、この道の長者にています、玄かれどふじのなるさはをふじのなるさよみて、なるさの入道、名なしだ大將とつがひて、人にわらはれ給ひしかばいみじきこの道の遺恨にてなん侍し、おのく是ほどの事玄り給はぬにはあらじ思わたり侍りけるにこそ、

〔宇治拾遺物語十二〕これも今はむかしならに藏人得業惠印といふ僧あり、鼻おほきにてあか、りければ大鼻の藏人得業といひけるをのちさまには、ことなしこて、鼻藏人とぞいひける、なほのちくには、鼻藏々とのみいひけり、
〔宇治拾遺物語十三〕今はむかし兵衛佐なる人ありけり、冠のあげをのなが、りければ世の人あげをのぬしとなんつけたりける、

〔源平盛衰記三十三〕太神宮勅使附緒方三郎責平家事

日數積ツテ月滿ヌ、花御本男子ヲ生、隨爲成長、容顔モユ、シク、心様モ猛カリケリ、母方ノ祖父ガ片名ヲ取テ、是ヲ大太童ト呼、ハタシテ野山ヲ走行ケレバ、足ニハアカ、リ常ニ分ケレバ、異名ニハ駆童トモ云ゲリ、此童ハ鳥帽子著テ、駆大彌太ト云、

〔十訓抄〕京極太政大臣宗輔公は、蜂をいくら共なく飼給て、何丸か丸と名を付てよび給ければ召に隨て、格勤者なごを勘當し給けるには、何丸某さしてことの給ければ、其ま、にぞふるまひける、出仕の時は、車のうちうへの物見にはらめきけるを、とまれとの給ければ、とまりけり、世には蜂飼の大臣とぞ申ける、不思議の徳おはしける人也、

〔古事談一王道后宮〕保延五年四月廿五日、齋王令入本院給之後、次第使左馬助藤敦頼與肥前權守俊保同乘退出之間、於一條大宮馬部數十人圍之、先敦頼引落自車、○中不殘冠轔一物剥取之、又車等